

生涯発達心理学の授業を受け持つようになってから、約15年が経ちました。その間、学生とやりとりをする中で、いくつかの変化を感じ取ってきました。1つ目は、幼い子どもに興味や関心をもつ学生がかつてよりも減り、将来の子育てへの不安を表す学生が増えたこと、2つ目は、高齢者や介護の問題に関心をもつ学生が増えたこと、3つ目は、前向きではありながら、将来への漠然とした不安を訴える学生が増えたことです（あくまで私の個人的な印象です）。

幼い子どもに興味や関心をもつ学生が減り、高齢者に関心をもつ学生が増えた背景には、実生活の中で子どもに接することが少なくなったと同時に、街中で高齢の方を見かけたり、自分の親が祖父母の介護をする姿を見たりすることが増えたことなどがあるのでしょう。また、多様な生き方が認められるようになった現代では、自己責任のもとに1つの選択肢を選ぶ、ということが、かつてよりも大変な作業になっているのかもしれませんが。いまはさまざまな情報が簡単に手に入り、自分であちこちに足を運ばなくても、部屋にいながらにしてある程度の情報は得ることができます。しかし、そこに実体験が伴ってなければ、また、実体験を通して得られた手応えや自信がなければ、どんなに多くの情報があっても、漠然とした不安が残るのは当然のことだといえるでしょう。

「知らない」「わからない」ということはしばしば、人に不安を引き起こします。幼い子の世話をしたことがない学生が、将来の子育てに不安を感じるのは無理ありません。しかし、身近にいる幼い子どもに意識をして注意を向け、子どもがなぜそのような行動をとるのかを考えたり、自分が実際に見た子どもの行動と研究知見とを照らしてみたりすると、「子どもっておもしろいかも。将来、自分でも子どもを育ててみたい」と思う学生は少なくないようです。また、子どもから大人になっていくときに、人はこんなことを考えたり、こんなことに悩んだりする、という知見にふれたり、学生同士で将来について話し合ってみたりすると、少なからぬ学生が「こんなことを思っていたのは、自分だけではなかったんだ」と安堵の気持ちをもつようです。

私たちの多くは、似たような変化を経験し、発達していきます。私たちの発達には共通性があるからこそ、同世代の仲間と興味や関心、悩みを共有することができるのだといえます。また、少し先に行く世代の人は、多くの人がそうした悩みを乗り越えていくことを体験的に知っているからこそ、自分よりも若い世代の人に寄り添い、支えていくことができるのです。また、若い世代の人は、先に行く世代の人が過去にそうした悩みを乗り越え、いまはその年代ならではの悩みや問題に向き合っていることを知ることで、自分を支えてくれた人への感謝や尊敬の念をもつようになるのでしょう。

一方で、私たちの発達には共通性だけではなく、個性もあります。一人ひとりが生まれもった資質は異なることに加え、発達上のある状態に至るまで、どのような人に出会い、どのような経験をしてきたのかは、人によって実にさまざまです。その人が出会う一人ひとりの人や、1つひとつの出来事が、その人の発達を形づくっていくのだといえます。

この本では、発達とはどのような現象であるのか、また、人は一生涯を通して、どのようなメカニズムのもとに、どのような発達を遂げていくのかを扱っています。本の中では、「この時期にはこのような変化が起こる」という発達の共通性の記述に紙面の多くを費やしていますが、発達の共通性を実体験のもとに確かめることに加え、発達の個性について知るためにも、自分自身の育ちを振りかえってみたり、身近な人たちと話をしたり、周りの人たちを観察してみてください。そのためのツールとして、各章には **QUESTION** (クエスチョン) を設けてあります。ぜひ、いろいろな人たちと **QUESTION** の答えを分かち合って、発達についての見方を広げ、考えを深めていってほしいと思います。

最後に、筆者ら4人は、心理学を学びたい学生や、教職を目指したり教職についていたりする学生、福祉の仕事を目指している学生など、異なる志望をもつ学生を対象に、異なる地域の大学で教鞭をとっています。また、異なる年代の人たちを対象に、研究や支援の仕事をしています。この本を作成するにあたって、これまで教育や研究、支援の場で関わってきたたくさんの人たちを思い浮かべながら、人の育ちや発達についてどんなことを伝えたいか、どんなことを知っておいてほしいかを4人で考え、何度もミーティングを重ねてきました。

そのような意味ではこの本の章すべてに、筆者ら全員の思いがこめられています。本書が、学問としての知識を得るためだけでなく、あなた自身やあなたの周りの人を理解し、あなたのこれからの歩みを考える手がかりの1つとなってくれば、筆者としてはこれほど嬉しいことはありません。

筆者らもまた、人として、職業人として発達途上にあり、本書の作成を通して得られた理解や発見がたくさんありました。今回、このような機会を設けてくださり、出版に至るまで細やかなサポートをしてくださった有斐閣の中村さやかさんに、深く感謝いたします。

2014年11月

著者を代表して 坂上 裕子

インフォメーション

- 各章のツール 各章には、KEYWORDS, QUESTION, POINT が収録されており、適宜 Column, comment が挿入されています。
 - *本文中の重要な語句および基本的な用語を、本文中では太字（ゴシック体）にし、章の冒頭にはKEYWORDS 一覧にして示しています。
 - *本文中に、学びのスイッチを入れるツールとして、「考えてみよう」「やってみよう」と読者へ問いかけるQUESTION を設けています。自分のことを想像したり、振りかえったり、身近な人たちと話をしたり、周りの人たちを観察したりしてみてください。
 - *章末には、各章の要点をわかりやすく簡潔にまとめたPOINT が用意されています。
 - *また、本文の内容に関連したテーマを、読み切り形式でColumn として適宜解説しています。
 - *本文中で右上に★印をつけている文や用語については、より理解を深めるための補足情報を、comment として該当頁の下部で解説しています。
- 索引 巻末に、索引を精選して用意しました。より効果的な学習に役立ててください。
- ウェブサポートページ 本書を利用した学習をサポートする資料を提供していきます。
http://www.yuhikaku.co.jp/static/studia_ws/index.html

著者紹介

坂上 裕子（さかがみ ひろこ）

担当 序, 第 1, 2, 4, 5, 6 章, 13 章（共同執筆）

青山学院大学教育人間科学部准教授

主 著

『大学1・2年生のためのすぐわかる心理学』（共著）東京図書，2012年。『はじめての質的研究法——生涯発達編』（共編）東京図書，2007年。『子どもの反抗期における母親の発達——歩行開始期の母子の共変化過程』風間書房，2005年。

読者へのメッセージ

私たちは皆、それぞれが、それぞれの年代の発達上の課題に向き合いながら、生活を共にし、日々を積み重ねています。このテキストが、あなた自身のことを、そして、あなたにとって大切な人たち、あなたの身近にいる人たちを理解するうえで、役に立つことを願っています。

山口 智子（やまぐち さとこ）

担当 第 11, 12 章, 13 章（共同執筆）

日本福祉大学子ども発達学部教授

主 著

『働く人びとのこころとケア——介護職・対人援助職のための心理学』（編）遠見書房，2014年。『老いのこころと寄り添うこころ——介護職・対人援助職のための心理学』（編）遠見書房，2012年。『人生の語りの発達臨床心理』ナカニシヤ出版，2004年。

読者へのメッセージ

発達心理学は、自己理解を深めるだけでなく、臨床実践にも役立ちます。特に、発達の時期や道筋の理解、今ここでの交流を楽しむ姿勢、発達を期待するまなざし、発達を促す環境づくりが重要です。また、私の研究テーマ「青年や高齢者は、自己や人生をどのように語るのか」は、大学生のときに感じた「なぜ、カウンセリングで話すとよくなるのか」という問いとつながっています。20歳前後に見つけた問いは貴重な問いです。この本を、あなたの問いの発見にも役立ててほしいと思います。

林 創 (はやし はじめ)

担当 第 3, 7, 8 章

神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

主 著

『他者とかかわる心の発達心理学——子どもの社会性はどのように育つか』(共編著) 金子書房, 2012年。『大学生のためのリサーチリテラシー入門——研究のための8つの力』(共著) ミネルヴァ書房, 2011年。『再帰的事象の認識とその発達に関する心理学的研究』風間書房, 2008年。

読者へのメッセージ

人の心の働きは、その発達の様子を知ること、ますますおもしろくなります。各章に設けられた問いを考え、このテキストを読み終えた頃には、「子どもはこんなふうに考えるんだ」「青年や高齢者にはこんな特徴があるんだ」といったように、「世の中の見え方」や「ヒトに対する感じ方」が変化していることにきっと驚かれることでしょう。このテキストによって、さらに発達心理学に関心を深めていただけると嬉しいです。

中間 玲子 (なかま れいこ)

担当 第 9, 10 章

兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授

主 著

『自己の心理学を学ぶ人のために』(分担執筆) 世界思想社, 2012年。『自己形成の心理学』風間書房, 2007年。『あなたとわたしはどう違う? ——パーソナリティ心理学入門講義』(共著) ナカニシヤ出版, 2007年。

読者へのメッセージ

自分がどんな人間なのか、どのように生きていけばいいのか。そんなことを考えると、ちょっと広い視点に立ってみると、違った世界が見えてきます。ヒトであることの不思議、この時代・社会に生まれた不思議。その不思議の中で、いろんな人と出会い、経験し、そしてこういう自分になってきたという事実。自分が生きているということの醍醐味を味わうヒントになれば幸いです。

CHAPTER
0

ヒトとして生まれ、人として生きる _____ 1

人の生涯をめぐる普遍的な営みと今日的課題 (1) 本書の概要と構成 (3) 発達段階と発達課題 (4) 本書を手にしたあなたへ (7)

CHAPTER
1

発達するとはどういうことか _____ 8

- 1 発達観の変化 8
発達のゴールとしての大人 (9) 寿命の伸長とライフサイクルの変化 (9) 発達するのは子どもだけか? (9) 求められる新たな発達観 (11)
- 2 生涯発達心理学の理論的枠組み 11
獲得と喪失としての発達 (12) 発達の多次元性・多方向性 (13) 多様な要因の相互作用の結果としての発達 (13) 発達の可塑性 (14) 歴史に埋め込まれた個人の発達 (15)
- 3 進化の産物としてのヒトの発達 16
大きな脳 (17) 他者の心を理解すること、自己を反省的に見ること (17) 長い子ども期と高齢期の存在 (18)
- 4 社会や文化の産物としての発達 20
- 5 遺伝と環境——生まれは育ちを通して 21
遺伝情報が発現するメカニズム (22) 形質の個人差は何によって説明されるのか (23)

- 1 生命の芽生え—受胎から胎芽まで 28
胎児にとっての環境としての母体 (30)
- 2 胎児はお腹の中で何をしているのか 31
活発に動く胎児 (31) 五感の発達 (32) 胎児は感情を経験している? (33)
- 3 胎児期からはじまる親子のコミュニケーション 35
母親は胎児の存在をどう感じているのか (35) 母子の共同作業としての出産 (37)
- 4 出生をめぐる現代的な問題—出生前診断をめぐる 38
出生前診断とは (38) 晩産化と新型出生前診断 (39)

- 1 ピアジェの発達段階 43
ピアジェの発達理論 (43) 4つの発達段階 (43)
- 2 赤ちゃんは世界を知っている? 44
感覚運動期の発達 (44) 表象の発達と物理的世界の把握 (46) 数の理解 (48)
- 3 社会性の萌芽 50
顔の認知 (50) 社会性の発達 (50)

Column 赤ちゃんの心を調べる方法 45

- ① 他者からの関わりを引き出す生物学的基盤 54
- ② 乳児—養育者間の初期コミュニケーション 55
泣きと微笑み (55) コミュニケーションの担い手になる
(56) 心の理解を支える養育者の関わり (57)
- ③ コミュニケーションの中で育まれるもの 57
—アタッチメントの発達
アタッチメントとは (57) アタッチメントの発達 (58) 安
全基地としての養育者 (59) アタッチメントの個人差 (60)
アタッチメントの個人差の起源 (62) 発達早期におけるア
タッチメントの連続性と影響 (64)
- ④ 多様な関係が支える発達 65
さまざまな人間関係の中で育つ子ども (65) 発達の可塑性
(66)

- ① 内的世界を支える表象と象徴機能 70
表象と象徴機能の出現 (70) シンボルの使用と世界の広がり
(70) シンボルとしての言語の特徴 (70)
- ② 言葉が芽生えるまで 72
音声知覚と構音の発達 (72) 注意や意図の理解の発達 (73)
共同注視から共同注意へ (74) 共同注意から話し言葉へ
(75)
- ③ 幼児期の言語発達 76
初語の出現 (76) 語彙の発達 (76) 統語の発達 (77) 談
話 (ディスコース) の発達 (77) 読み書きへの関心 (78)
行動調整, 思考の道具としての言葉へ——外言と内言 (79)
- ④ 遊びが広げる子どもの世界 80
遊びとは (80) 遊びの発達 (80) 遊びにおける仲間との関
わり (81) 言葉と遊びを育てるために (82)

自分を知り、自分らしさを築く

84

関わりの中で育まれる自己

- 1 自己のさまざまな側面 84
- 2 主体としての自己を知る 85
自己感覚の芽生え (85) 自他の意図への気づきと、意図の共有と対立 (86)
- 3 客体として自己をとらえる 88
客体的自己の認識 (88) 第1次反抗期のはじまり (88) 自己意識的感情の出現 (90)
- 4 幼児は自己をどうとらえているのか 91
自己の経験を語ること (91) 概念的自己 (自己概念) の発達 (91) 拡張自己の発達 (92)
- 5 自己制御の発達 94
自己制御とは (94) 自己制御の発達とその文化差 (94) 自己制御の個人差 (95)

関わりあって育つ

98

仲間の中での育ち

- 1 心の状態の理解 98
感情の理解 (98) 欲求や信念の理解 (99) 誤信念課題 (100)
- 2 心の理論にもとづく社会性の発達 101
うそと欺き (101) 洗練されたうそ (101) 道徳的判断 (102) 共感性と向社会的行動 (104) 実行機能の発達 (104)
- 3 仲間の中での育ち 105
仲間関係 (105) 妬みと関係性攻撃 (106)

- 1 子どもと学校 110
前操作期の思考の特徴 (111) 具体的操作期の思考の特徴 (111) 形式的操作期の思考の特徴 (112) 移行期のつまりやすさと質的飛躍 (112) 学習行動と学習支援 (112)
- 2 記憶の発達 114
記憶のしくみ (114) ワーキングメモリ (116) 長期記憶 (117)
- 3 動機づけ 118
内発的動機づけと外発的動機づけ (118) 動機づけを高めるには (119)
- 4 思考の深まり 120
メタ認知を育む (120)

Column 領域固有性 113

- 1 青年期の発達の变化 124
- 2 自己に関わる認知の変化 125
自己理解の発達 (125) 時間的展望の発達 (126) 自己への否定的感情の高まり (127) 青年期の自己中心性 (127)
- 3 青年期の友人関係 130
友人関係の発達 (130) 友人関係と自己形成 (130) 友人関係に伴う不安 (132) 友人関係のチャンネルの変化 (133)
- 4 青年期の恋愛関係 134
友人関係から恋愛関係へ (134) 青年期の恋愛の特質 (135) 恋愛関係が親子関係に与える影響 (136)

5	青年期の親子関係	136
	親子関係の時代的变化 (136) コミュニケーションによる親子関係の発達 (138)	

Column 青年期の自我体験 129

CHAPTER
10

大人になるために

140

1	成人期のはじまり	140
2	アイデンティティの発達	141
	アイデンティティの感覚 (141) アイデンティティ地位 (142) 生涯にわたるアイデンティティ発達 (143) アイデンティティ発達の二重構造モデル (144)	
3	職業選択とキャリア発達	144
	現代社会における職業生活の様相 (145) 「やりたいこと」へのこだわり (145) 主体性を強制される時代 (147) 職業キャリアにおける性差の問題 (148)	
4	家庭生活における発達	149
	結婚という選択 (149) 結婚後のライフコース (150) ライフコース選択に関する意識の実態 (152) 男性の家事参加と夫婦関係 (153) 性役割観の形成 (154)	
5	成人期を生きるということ	155

Column 職業選択の重視点 146

CHAPTER
11

関わりの中で成熟する

158

1	世代性と人生の折り返しの危機	158
2	職業生活における発達	159

キャリア発達 (160) メンタリング——先輩に育てられ、後進を育てる関わり (161) 女性の職業生活 (161)

- 3 親としての発達 163
親になること——「授かる」から「つくる」へ (163) 親になる準備と子育て初期 (163) 子育てによる親の成長 (164) 子どもの自立を援助する難しさ (166) 子育ての卒業と夫婦関係の見直し (167) 子育て不安と専業主婦による子育ての見直し (168)
- 4 老親の介護や看取りにおける発達 169
「老親扶養」の意識変化 (169) 介護ストレス (169) 介護・看取りによる成長 (170)
- 5 ジェネレイショナル・ケアの担い手としての成熟 170

Column アロマザリング——比較行動学における子育て 168

CHAPTER
12

人生を振りかえる

173

- 1 老いるとはどういうことか 173
加齢についての理解とエイジズム (173) 生物学的加齢と心理的加齢の関連——心理的加齢モデル (175)
- 2 認知機能の加齢変化 176
記憶 (176) 知能 (176) 認知機能の低下を補償する方略と熟達化 (178) 認知機能の低下に対する予防的介入 (179) 知恵 (179)
- 3 パーソナリティの発達 181
人生の振りかえり (181) 超高齢期の課題と老年的超越 (181) 人生の意味づけの変容過程 (182)
- 4 発達を支える家族や社会のネットワーク 183
サクセスフル・エイジングと生きがい (183) 家族関係 (184) ソーシャル・ネットワークとコンボイ・モデル (185)
- 5 高齢者の死生観と死をめぐる問題 185
終末期の死のプロセス——キューブラー＝ロスの理論 (186) 日本の高齢者の死生観と「お迎え」体験 (186) 延命治療と

CHAPTER
13

発達とは十人十色

190

発達におけるつまずきをどう理解し支えるか

- 1 発達におけるつまずき——発達を理解することの重要性 …………… 190
- 2 発達障害 …………… 191
発達障害（神経発達症）とは（192） 発達障害への支援（195）
- 3 児童虐待とアタッチメントの障害 …………… 198
虐待を引き起こす背景——リスク要因とプロテクト要因（198） 虐待による子どもへの影響（199）
- 4 長い時間軸から見たつまずきと可塑性 …………… 200
乳幼児期（200） 児童期・青年期（201） 成人期（203）
- 5 つまずきの背景にある時代や文化 …………… 205
生活環境が激変する時代を生きる（205） 文化の影響——性同一性障害から性別違和へ（205）
- 6 つまずきの理解と支援に求められる発達の観点 …………… 206
生物・心理・社会的側面から総合的につまずきをとらえる（206） 時間的・発生的な過程に位置づけて、つまずきをとらえる（207） 障害や問題を内包する存在として、社会の中で生きる（208）

事項索引 ————— 211

人名索引 ————— 217

イラスト：山口みつ子

● あ 行

アイデンティティ 141, 159
 ——探求 142
 ——地位 143
 ——の危機 141
 ——発達の二重構造モデル 144
 欺 き 101
 足場かけ 78
 遊 び 69, 80
 機能—— 80
 協同—— 82
 ごっこ—— 70
 象徴—— 80
 ふり—— 70
 並行—— 81
 連合—— 82
 アタッチメント 57
 ——行動 58
 ——の影響 65
 ——の形成 199
 ——の質（個人差） 60, 62
 ——の障害 62, 199
 ——の連続性 64
 安定型—— 60
 安定した（不安定な）—— 60
 回避型—— 61
 抵抗型—— 61
 無秩序型—— 62
 安全基地 59, 60
 アンダーマイニング現象 119
 生きがい 184
 育児 →子育て
 異質性 132
 いじめ 202
 遺 伝 3, 22

遺伝子型 22
 意図（の理解） 58, 73, 75, 87
 ——的行動 57
 イメージ 70, 80
 インクルーシブ社会 208
 う そ 101
 悪意のない—— 102
 運 動 73
 エイジズム 174, 187
 エフォートフル・コントロール 94, 105
 嚙下運動 31
 お迎え 186
 親子関係 136, 137
 親になること 163
 親の成長 164
 音 韻 71, 72

● か 行

外 言 79
 介 護 169
 会 話 78
 書き（の習得） 79
 ——の障害 194
 学 習 118
 ——障害 192
 ——支援 113
 ——動機 119
 獲得と喪失 11
 過食症 202
 数の理解 48
 家族（関係） 9, 137, 184
 ——のライフサイクル 9
 ——への支援 197
 語り（ナラティブ） 78
 子どもの（自己の）—— 91
 活動理論 183

- 家庭生活 149
- 加 齢 174
 - 心理的—— 175
 - 生物学的—— 175
- 感覚運動期 43
- 感覚機能 178
- 環 境
 - 調整 195, 196
 - の探索 59
 - 共有—— 24
 - 非共有—— 24
 - 養育—— 199
- 環境的要因 3, 13, 23, 191
 - への適応 12
- 関係性 55, 73
 - 親密な—— 133, 134
- 関係性攻撃 107, 132, 202
- 感 情 58, 90
 - 共有 104
 - 認知 104
 - の発達 99
 - 原初的—— 90
 - 自己意識的—— 90
 - 自己意識的評価的—— 91
 - 他者意識的—— 90
 - ネガティブな—— 106
- 感情語 99
- 記 憶 114, 176
 - 意味—— 115
 - エピソード—— 115
 - 宣言—— (宣言的知識) 115
 - 短期—— 114
 - 長期—— 114, 117
 - 手続き—— (手続き的知識) 115
- 危機 →心理社会的危機
- 気 質 62, 95
- 規準喃語 72
- 期待背反法 45
- 規範 (ルール) 90
- 虐待 (児童虐待) 198
- キャリア (職業生活) 147, 160
 - 発達段階 160
- ギャング・グループ 106
- 嗅 覚 32
- 9カ月の奇跡 75
- 既有知識 117
- 吸てつ反射 31, 44
- QOL 183
- 驚愕様運動 31
- 共感性 104
- 共感的自己肯定感 197
- 協調性 59
- 共同注意 (行動) 18, 73, 75, 87
- 共同注視 74
- 共鳴動作 55
- 均衡化 43
- クーイング 72
- 具体的操作期 43, 111
- クラウド (大きな集団) 134
- クリーク (小規模集団) 134
- ケ ア 170
- 計算の障害 194
- 形式的操作期 43, 111
- 形 質 22
- 系統発生 15
- 軽度認知障害 179
- 系列化 112
- 結 婚 150
- 限局性学習症 (SLD) 192, 194
- 言 語 69
- 健康長寿 187
- 語 彙 76
- 構 音 72
- 攻撃性 127
- 向社会的行動 104
- 公正さ 103
- 行 動
 - 制御 105
 - 調整 79
 - の基準や規範 90
- 幸福感 183
- 高齢者 174

五感 32
 呼吸様運動 31
 心の理論 99, 113
 2次のもの— 101
 個人差 4, 23, 24, 95
 個人的寓話 128
 誤信念課題 100
 子育て（育児） 6, 161
 —ストレス 197
 —不安 168
 父親の— 165
 直感的— 55
 個体発生 15
 個別的支援 196
 コミュニケーション 35, 73, 192, 199
 コンボイ・モデル 185

● さ 行

最適化 178
 サクセスフル・エイジング 183
 作動記憶 →ワーキングメモリ
 ジェネレイショナル・サイクル 170
 シェマ 43
 視覚 33, 85
 視覚的断崖 45
 自我体験 126, 129
 時間的展望 126
 自己 85, 125
 —意識 18, 90
 —概念 91
 —形成 130
 —決定 126
 —主張 87, 94
 —主張期 89
 —受容感覚 85
 —制御 82, 94
 —選択 119
 —に対する否定的感情 127
 —評価 106, 125
 —抑制 94

 —理解 125, 132
 概念的— 92
 拡張— 93
 客体としての（客体的）— 85, 88
 現実— 125
 私的— 126
 主体としての— 85
 生態学的— 85, 86
 対人的— 85, 86
 理想— 125
 思考 79
 組み合わせ的— 112
 論理的— 44, 112, 126
 自己中心性（中心化） 44, 111
 青年期の— 128
 思春期スパート 124
 自身焦点 128
 死生観 186
 自尊感情（自尊心） 106
 —の低下 196
 実行機能 105
 —の問題 194
 自動化過程 178
 児童期 4
 死のプロセス 186
 自閉スペクトラム症（ASD） 192
 社会 20
 社会化 95, 132
 社会性 98
 —の障害 192
 乳児の— 50
 社会的参照 75
 社会的比較 106
 社会的微笑 56
 社会脳仮説 17
 シャーデンフロイデ 106
 就職 145
 熟達化 179
 出産 37, 161
 出生前診断 39
 寿命 9, 18, 185

- 馴化—脱馴化法 45
 生涯発達 3, 11
 象徴機能 70
 職業生活 → キャリア
 職業選択 145
 初語 76
 触覚 32, 85
 処理水準効果 117
 自立 136, 167
 —と依存 127
 自律性 119
 進化 16
 信号行動 58
 人生の意味づけ 182
 身体感覚 85
 信念（の理解） 99
 シンボル（象徴） 70
 心理社会的危機（危機） 5, 159, 181
 心理的離乳 137
 ストレンジ・シチュエーション法（SSP）
 60
 成人期 4
 性同一性障害 206
 青年期 4
 生物学的要因 3, 13, 191
 性別違和 206
 性別職域分離 148
 性役割観 154
 性役割分業観 153
 生理的早産 18
 生理的微笑 55
 世代間伝達 15
 世代性 159
 接近行動 58
 摂食障害 202
 選好注視法 45
 染色体異常 39
 前操作期 43, 110
 相互作用 4
 遺伝（生物学的要因）と環境（的要因）の
 — 4, 13, 23, 191
- 操作 43
 双生児法 23
 想像上の観客 128
 ソーシャル・ネットワーク 185
 育てにくさ 199
 祖母仮説 20
- た 行
- 胎芽（期） 29
 胎児（期） 4, 29
 対象の永続性 46
 対人関係 105, 126
 —の困難さ 193, 199
 胎動 31, 36
 第2次性徴 124
 ダウン症候群 39
 多次元性 13
 他者の心の理解 17, 57, 82, 98
 脱衛生化 137
 脱馴化 45
 脱中心化 44, 111
 多動性・衝動性 194
 タブラ・ラサ（白紙） 42
 ダブルタッチ 86
 多方向性 13
 探索（行動） 59, 89
 談話 77
 知恵 179
 知覚 85
 知能 13, 176
 結晶性— 13, 177
 流動性— 13, 177
 注意 73, 75
 注意欠如／多動症（AD/HD） 192, 194
 中心化 → 自己中心性
 聴覚 33, 85
 超高齢期 178
 長寿革命 187
 調節 43
 定位行動 58

DSM-5 192
適 応 34, 190
デートDV 203
同 化 43
動機づけ 118
 外発的— 118
 内発的— 118
統 語 71, 77
道徳性 103
道徳的行動 95
道徳的判断 102
トランスジェンダー 206

● な 行

内 言 79
内的作業モデル (IWM) 64
仲間 →友人関係
泣 き 55
二次障害 197
乳児期 4, 43
妊 娠 28
認知 (発達) 80, 120, 178, 201
認知症 179, 204
妬 み 106
年齢的事象 13
脳 17

● は 行

把握反射 44
廃用性障害 176
パーソナリティ発達 181
発 達 8
 ー観 9
 ーの可塑性 14, 67
 ーの偏り (つまづき) 191
発達課題 5
発達期待 94
発達障害 192
 ーへの支援 195

発達段階 5, 110
話し言葉 76, 91
反抗期 88
 第1次— 89
 第2次— 127
晩婚化 2, 150
晩産化 2, 39
反 射 44
反社会的問題行動 202
ひきこもり 201
人見知り 58
非標準的事象 13
表現型 22, 23
表出行動 55, 56
表出ルール 102
表 象 43, 46, 59, 70, 88
表情 (乳児の) 33
比例概念 112
夫婦関係 167
不注意 194
物理的環境 (物) との関わり 74, 86
物理的世界の理解 46
不登校 201
不連続的变化 13
プロダクティヴ・エイジング 187
プロテクト要因 66, 199
プロテージ 161
文 化 15, 20, 191
分散効果 118
分離不安 58
分類 (クラス包含) 112
ベビースキーマ 55
暴 力 202
母 語 72
歩行反射 44
補 償 175, 178
補償を伴う選択的最適化 178
保存課題 111

● ま 行

- マークテスト 88
- MAMA サイクル 143
- 味 覚 32
- 3つの山問題 111
- メタ認知 120
 - 的活動 120
 - 的知識 121
- 目と手の協応 45, 74
- メンター 161
- メンタリング 161
- 目標修正的協調性 59
- 文字学習 78
- 模 倣 70, 87
 - 学習 75
 - 延滞—— 70
- モラトリアム 142, 159

● や 行

- やせ症 202
- 友人（友だち）（仲間）関係 105, 130, 202
- 指さし 75
 - 叙述（共感）の—— 76
- 養育行動（養護反応） 55, 56
- 養護性 163

- 幼児期 4, 76
- 抑 制 105
- 4次元超音波（4D） 29
- 欲求（の理解） 99
- 読み（の習得） 79
 - の障害 194

● ら 行

- ライフイベント 155, 175
- ライフコース 150
 - 選択 150, 203
- ライフサイクル 9, 161, 170
- ライフレビュー 181, 187
- リスク要因 66, 198
- リストカット 203
- 離脱理論 183
- 領域一般性 113
- 領域固有性 113, 191
- 歴史的現象 13
- レジリエンス 66, 191
- 恋愛関係 134
- 連続的変化 13
- 老年的超越 182

● わ 行

- ワーキングメモリ（作動記憶） 105, 116

人名索引

● あ 行

- 市川伸一 119
ヴィゴツキー (L. S. Vygotsky) 79
氏家達夫 66
エインズワース (M. D. S. Ainsworth)
60
エリクソン (E. H. Erikson) 5, 141, 158,
170, 179, 181
岡本祐子 159

● か 行

- 柏木恵子 94, 168, 169
キューブラー＝ロス (E. Kübler-Ross)
186
清藤大輔 186
クール (P. K. Kuhl) 72
グローテバント (H. D. Grotevant) 138
コチャンスカ (G. Kochanska) 95
コールバーグ (L. Kohlberg) 102

● さ 行

- シャイエ (K. W. Schaie) 176
シャイン (E. H. Schein) 160
ソディアン (B. Sodian) 101

● た 行

- タルウォー (V. Talwar) 101

- ダンフィー (D. C. Dunphy) 134
トービン (J. J. Tobin) 94
トーンスタム (L. Tornstam) 181

● な 行

- ナイサー (U. Neisser) 84, 92
西平直 170
根ヶ山光一 168

● は 行

- バトラー (R. N. Butler) 181, 187
バルテス (P. B. Baltes) 11, 180
パルモア (E. B. Palmore) 174
ピアジェ (J. Piaget) 43, 80, 102, 110
ファンツ (R. L. Fantz) 50
ブロス (P. Blos) 132
ブロンフェンブレナー (U. Bronfenbrenner)
21
ボウルビィ (J. Bowlby) 57, 64

● ま 行

- マーシャ (J. E. Marcia) 143
メルツォフ (A. N. Meltzoff) 51

● ら 行

- リー (K. Lee) 101
ルイス (M. Lewis) 90
ローレンツ (K. Lorenz) 55



有斐閣 ストゥディア

YUHIKAKU

問いからはじめる発達心理学——生涯にわたる育ちの科学
*Developmental Psychology Beginning with Questions:
A Life-Span View*

2014年12月25日 初版第1刷発行
2016年10月30日 初版第2刷発行

	さか	がみ	ひろ	こ
	坂	上	裕	子
	やま	ぐち	さと	こ
	山	口	智	子
著 者	はやし			はじむ
	林			創
	なか	ま	れい	こ
	中	間	玲	子
発行者	江	草	貞	治
発行所	株式	有	斐	閣
	会社			

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03)3264-1315 (編集)

(03)3265-6811 (営業)

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社 / 製本・複製本印刷株式会社
© 2014, Hiroko Sakagami, Satoko Yamaguchi, Hajimu Hayashi,
Reiko Nakama. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-15013-3

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@copy.or.jp)の許諾を得てください。